2007 年 7 月 15 日（第９回）
2007 年度 JLA 中堅職員ステップアップ研修（2）
領域：情報サービス

情報技術と図書館

小田光宏（青山学院大学）

1　情報技術を活用した図書館の姿：政策関連文書における要点

1.1　地域の情報拠点

図書館をハブとしたネットワークの在り方に関する研究会（文部科学省）『地域の情報ハブとしての図書館：課題解決型の図書館を目指して』（2005 年）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/05091401/all.pdf

1.2　課題解決型図書館

これからの図書館の在り方検討協力者会議（文部科学省）『これからの図書館像：地域を支える情報拠点をめざして』（2006 年）
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/04/06032701/009.pdf

2　ICT と図書館サービス：機能と実態

2.1　コミュニケーション機能：高度通信技術の適用

・ウェブページの活用
　→PR 活動
　→資料予約・取り置き（reservation）
・電子メールの活用
　→メールレファレンスサービス
　→チャットレファレンスサービス
　→アラートサービス
　→SDI（選択的情報提供）

2.2　インフォメーション機能：情報源としての活用

・コンテンツ受信
　→ウェブページの検索利用
　→ウェブ上のデータベースの使用
・コンテンツ発信
　→Web OPAC

→レファレンスリンク集の作成
→各種自館作成ツールの掲載

2.3　ネットワーク機能：情報の共有がもたらす効用

・仮想的図書館ネットワーク
→Web OPAC の横断検索（総合目録機能）
→バーチャルレファレンスサービス
・成果共有型ネットワーク
→レファレンス協同データベース形成

3　ICT の特性がもたらす図書館サービスの岐路：5W1H による物語

3.1　When：時間的対応

・同期形態
→24/7 型サービス
・非同期形態
→オンデマンド対応

3.2　Where：遠隔利用

・優先順位の再確認
→来館者と非来館者
→住民と非住民
・利用の場
→サイトライセンス方式によるアクセスの制限
→不正（違法）アクセスからの回避

3.3　Who：コラボレーション

・役割の認識
→各図書館における独自性の追求（公立図書館における地域との連関）
→図書館協同体としてのサービスの展開
・プラットフォーム
→協同のための仮想的な場の導入

3.4　What：サービス構造の変容

・資料と情報
→所蔵に依存しない資料の提供（アクセスの場の提供）
→十分な典拠性を持たない情報の提供（再参照の難しさ）
・副産物
→サービスプロセスの成果の蓄積（ログの活用）
→サービス内容の可視化（エビデンスとしての意義）

3.5　How：サービス方法の変容

・利用者の行動に沿った方法の取捨選択

→認知科学の知見に基づく洞察

→情報利用に関する感性や習慣に対する理解

・ユニバーサルな手法の採用

→デジタルデバイド解消への貢献

→障害児・者に対するデジタル情報の提供

3.6　Why：なぜ？

・異なる可能性に対する意識

→ICT を用いないという究極の選択

→議論なしに「使えるから使ってしまう」という弊害

→「便利だから」という理由だけで使命を放棄する危険性

4　議論の焦点：いくつかのキーワードを抽出すると

4.1　Portal

・図書館という入口への期待

→図書館 HP の案内機能からの脱却

4.2　Interface

・OPAC の質的変容

→図書館のインターフェイスにおける「もの」と「こと」のはざま

4.3　e Learning

・OJT（Independent OJT）の進展

→独習型プログラムの開発

4.4　Mentor

・図書館員の古くて新しい仲介者としての役割

→助言機能の高度化

→知的財産権（著作権）に対する啓発

4.5　Wiki Wiki

・活き活きとした知の創造の可能性

→「個人による知の深化」から「協同による知の結集」に向けて

→「学術的アプローチ」から「臨床的アプローチ」に向けて

→「専門家による知の切り売り」から「市民による知の供出」に向けて